



## 東西しらかわ小学校長会 広報部

第 2 号 平成31年2月6日  
 発行人 会長 大杉 和規

## やっぱり学級集団づくり

東西しらかわ小学校長会副会長 仁科 道夫  
 (白河市立白河第三小学校長)

「学級づくり6週間」とは昔から言われ続けてきている言葉であるが、学級づくりが思うようにできず困っている先生方は多いのではないだろうか。

本校でも、教育活動実践公開を3年前から隔年で、国語科・算数科・道徳科で実施してきている。

しかし、なかなか子供中心の授業が展開していない現状が見られる。その原因は、教材研究不足・授業力不足等が考えられるが、その学級の人間関係も大いに関係しているのである。例えば、自分の発言が学級の友達に受け入れてもらえるかどうかということは、発言者にとって大切なことである。自分の意見を広く友達に認めてもらえるような学級であれば、自分が思っている小さな疑問でも、安心して学級のみんなに問うことができるのである。今までも「生徒指導の機能(自己存在感・自己決定の場・共感的理解のある学級の雰囲気)」を活かして授業をするように指導を受けてきているので、先生方も日々実践していると思われるが、では実際に、「何を、いつ、どこで行い、その結果をどのように分析し、次に生かしていくのか。」という具体的な指導を私はしてこなかった。そこで、本校では、2年前から会津大学教授 荻間沢勇人先生を講師としてお招きし、全教職員で研修を実施することにした。荻間沢先生の論によれば、学級づくりにおいて重要なことは、『ルール』と『リレーション』にある。」というのである。そのため、その重要性を全教職員に理解

してもらうためには「学級開き」を行う前に、荻間沢先生の考えを聞くことが重要と考え、4月の春休み中に1日かけて講義と演習を開いている。先生によれば、「4月当初は、基本的な生活習慣と学習習慣を身につけさせることに主眼をおき『ルール』を徹底させること。それが身につけてきたならば『リレーション』を行い、子供達との距離感をつめ、授業や学校生活が満足いくものとなるように指導すること。」が大切であるとのことであった。「ルール」をしっかりと身につけさせるという点では、『学級づくり6週間』という昔ながらの合言葉と合致するなあ。」と感じさせられた。「リレーション」に関しては、火曜日のモジュールの時間(8:30~8:45)を活用し、全学級で「構成的グループエンカウンター(SGE)」を実施することとしている。その例としては、「じゃんけん大会・足じゃんけん・バースデーサークル・質問じゃんけん・〇〇ビンゴ・一緒に立とう・どんな絵だったかな?さいころトーキング」等である。これを実施することにより「自己受容・信頼感・感受性・自己主張・自己理解・他者理解」ができるようにという思いが育つようにしている。それと同時に、QUテストを活用して学級の実態把握に取り組んでいる。



QUテストに関して (足じゃんけん) は5月と11月に実施し、その変容をとらえ、さらなる学級づくりに生かそうと考えている。QUテストは、「学級生活満足群・非承認群・侵害行為認知群・学級生活不満足群」の4つのカテゴリーになっており、「学級生活満足群(全国平均41%)」の数値が高ければ高いほど、子供達が学校生活を意欲的に送っているということになるのである。結果では、「学級生活満足群」が60%から70%となり、担任の努力した成果が見られ、先生方も実践してきた満足感が表情に現れた。但し、これらを実践してきたからと言って、生徒指導の問題が全て解消されてきたわけではないが、今後も子供達が学校生活を意欲的に送っていくように「学級集団づくり」に努力していきたい。

## 活動の広がり、深まり、そして充実

## 授業が好き、教えることが好き

東西しらかわ小学校長会副会長 荒川 文雄  
(棚倉町立棚倉小学校長)

本年度から西白河小学校長会と東白川小学校長会が統合し、東西しらかわ小学校長会となりました。昨年までは、11名で活動しておりましたが、本年度より37名の校長先生方と共に活動できましたことに心から感謝を申し上げます。

本稿では、統合によって校長会の活動にどのようなよさが生じたかを報告いたします。

まず、活動が広がりました。県南全域の校長先生方との情報交換は、情報の内容が豊富で質も高く、まことに有意義でした。同じ管内でも抱えている問題が微妙に異なること、同じ課題がある場合にはかなり深刻なものであることなどを共有でき、校長としての情報収集力と判断力が向上したように思います。

次に、研究活動や研修活動に深まりが見られました。特に、各班で行われている研究報告では、多くのことを学ぶことができました。さらに、働き方やICTなどの研修では、今共有すべきことを学ぶことができました。研究も研修も、校長としての見識を深めるのに役立ちました。

そして、東西しらかわ校長会での活動を通して、県南域内各校の実践について、多様さ、豊富さ、先進性など今まで見えなかったものが見え、各校長先生方の考え方や学校経営力などを学ぶことができ、充実感を味わうことができました。

校長会の統合により、各部の仕事量は増大したのにもかかわらず、東白川郡の9名の校長を温かく迎え、共に活動することで、「県南は一つ」の理念を具現していただきました旧西白河校長会の皆様方に重ねて心から感謝を申し上げます。今後ともよろしく願いいたします。

現在、棚倉班の9名の校長は、来年の全連小の秋田大会での発表に向け、東西しらかわ校長会のよさを全国に発信すべく、自校の実践を充実させているところです。

今後の課題として、今まで東西別々に行われてきた児童のための諸活動や行事をどのように精選及び統合していくかを、子どもや保護者の意見も踏まえ検討していきたいと考えています。会員の皆様方のご指導をよろしく願いいたします。

白河市立白河第五小学校長 小林 茂  
児童生徒へ教えることが好きで、今も毎日のように授業へ足を運ぶ。今年度になり児童が、朝校長先生〇〇時間が算数ですが都合は大丈夫ですかと私を授業へ誘いに来る。算数のつまずきのある児童を中心に教えているが、つまずいている点を色々試行錯誤して説明している内に、児童の目の色が変わる瞬間がある。この瞬間が児童と一つのものを共有し、成し遂げることが出来たと達成感が私の中にも広がってくる。児童に私が活かされる時である。授業の終わりに「やっぱり校長先生でないとだめだよ。」の賞賛の一言を児童がくると、私も調子に乗って「また明日頑張ろう。」と声をかける。

教諭時代は、出張で時間がつぶれると他教科の先生から時間をもらって授業をしたり、五教科が選択教科の頃は、100人以上を相手に大きな教室で数学の授業をしていた。

教頭、校長時代はどの学校でも児童生徒に教えること、特に授業が好きで、毎日のようにどこかの教室で算数・数学を教えてきた。中学校在職中は、高校受験があるため、先生方にも喜ばれたと自分で勝手に思っている。中学校では教えることが日常化してくると、生徒は校長先生から小林先生に呼び方が代わる。先生方の出張や休暇など補欠に喜んで教室に行き授業を勝手に進めるため、時に教科担当の先生に煙たがられた。どの学校でも私の生徒になっているのは教室に入れない児童生徒で、国語、社会、数学、理科を支援員の方共々黒板を使い授業をしていた。この時間が実に楽しく、私の生きがいとなっていた。不思議なものでどの学校にも教室には入れない生徒は数名いて、私の生徒となってくれていた。

白五小の2年間は、各学年体育の水泳授業にお邪魔をし、一日2～4時間はプールに入り、水泳指導のお手伝いをしていた。児童からは水泳の先生と思われていた。教職生活38年の内半分以上が、管理職時代を過ごした私にとって、授業をする時間が少なく不完全燃焼であったために、授業で教えることに飢えていたのかもしれない。教えることで児童生徒の変わる姿を見ることは教師の喜びである。

## 平成を生き平成に終わる教職人生

## 子どもと関わる仕事ができる

白河市立関辺小学校長 益子 保弘

昭和が終わる昭和63年に採用となり、平成という時代が終わる平成31年に退職となります。昭和の終わりから平成の終わりまで、一つの時代を教員として生きることができて良かったという自己満足感と後悔が残る心境です。

今年の元旦に、初めて受け持った子どもたちが私の還暦のお祝いとして同級会を開いてくれました。初任で4年生から3年間受け持ち、初めて卒業させた子どもたちです。今年で40歳となり、それぞれが家庭を持ち、社会人として頑張っていることに安心しました。

自分なりに教職人生を簡単に振り返ってみると、初任校での5年間は、「先輩の真似と勢い」だけの毎日、2校目の4年間は、「挫折からの脱却」でした。大規模校に初めて赴任し、1年目から6年生の担任、それに加え体育主任でした。特に学級の女の子たちとは信頼関係がなかなか築けず挫折を味わいました。次の年は、1年目の反省を生かし、5年学年主任としてスタートし、卒業まで受け持ちました。4年目は、2年生の学年主任でした。3校目は、「授業との戦い」でした。僻地経験をしなければならず鮫川の学校に4年間勤務。あるすばらしい先生との出会いをきっかけに授業の指導力を向上したいという気持ちで授業に力を入れましたが、なかなか思うようにはいかず、授業の難しさを痛感した4年間でした。

4校目は、「管理職への登竜門」となり、大規模校で研修主任、教務主任を務めました。5校目は、「人と出会う喜び」を実感しました。新任教頭として南会津で3年間勤務しました。何も知らない土地での人との出会いは、嬉しさがあふれ、心を広くたくましくしてくれました。その後も教頭として4校勤め、その中で大きな失敗も経験しました。最後に校長として3年間勤めることができました。組織を動かすことの難しさを実感しました。

ある人との出会いから教職の道に進み、数え切れない人と出会い、助けられ、支えられ、教職人生を終わることができます。31年間、お世話になりました。

白河市立表郷小学校長 神永 睦子

大学卒業以来ずっと教職の道を歩み、子どもを育てるといふ尊い仕事をさせていただいた。その中でたくさん研修する機会があったが、宮大工の小川三夫棟梁の講演が忘れられない。小川さんは法隆寺の宮大工であった西岡常一さんのただ一人の内弟子で、「<sup>いかるが</sup>鶴校舎」を設立し弟子を育成した人でもある。私の古いメモから抜粋する。

○鶴校舎は他で生きていける能力がある子は採用しない。苦しくなったときに辞めてしまうからだ。手先は器用でなくていい。器用な子は頭の中も器用で考えが浅い。器用さに溺れてしまう。「もういい。」と言わなかったら針になるまで研いでしまうような子を採用する。物作りは執念である。○鶴校舎では教えない、命令しない。教えることは甘えに繋がる。その子がやる気を起こすまでほっておく。削りたいと思う気持ちが頂点に達したときに鉋を貸す。削ってみせる。その日の鉋の研ぎ方は今までと違う。命令すると命令されたことしかやらなくなる。片づけ方も教えない。工夫させる。教えたことは身につかない。時間は掛かるが技は言葉ではなく体で覚えるものだ。「カン」とか「コツ」は感じ取ることで教えることはできない。研ぎ澄まされた精神の中で掴むものである。○木は一本一本皆違う。木をよく見て一番合ったところに使う、寸法ではなく木の癖を見て、癖を生かして組んでいく。古代建築は一本一本違う不揃いの木が支え合っていてできる。木の癖を見て、芯を通した仕事をしているから強い。

穏やかな中にも仕事に対する厳しさがあつた。講演を聴いた時の感動を今でも覚えている。私達はある程度の期間で成果を出さなくてはいけないので教えないわけにはいかない。しかし、待つことの重要性は十分伝わってきた。感覚を育てること、一人一人を生かすことの大切さを学んだ。

小川さんのようにはいかなかったが子どもと関わる仕事ができ、出会った子ども達から多くの宝物をもらった。たいへんなこともあつたがその時できることを精一杯やってきたつもりなので悔いはない。好きな仕事できたことは幸せである。これからは、支えてくれた人に恩返しをしたい。

## 不 易 と 流 行

## 今、思うこと

西郷村立小田倉小学校長 佐藤 雅義

ほぼ10年ごとに見直されてきた学習指導要領。改訂作業は、10年後の社会を見通し、必要とされる能力がどのようなものであるのかということ念頭に策定されてきました。しかし、改訂の度に教育現場が慌ただしくなる事は事実です。

「生きる力・ゆとり教育」が目玉の平成10年告示では、教育内容の厳選、完全学校週5日制の導入、総合的な学習の時間の新設。「脱ゆとり」と言われた平成20年公示では、授業時数の増、指導内容の充実、外国語活動の導入が改訂のポイントでした。平成30年改訂の新学習指導要領は、「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）」を看板に道德の教科化、外国語・外国語活動の強化、プログラミング教育の必修化が新たな目玉になっており、働き方改革の流れの中で時数をどう確保するかが課題となっています。

そんな折、なぜか思い出されるのが、平成8年7月に中央教育審議会答申で引用された松尾芭蕉の「不易流行」です。「不変の真理を知ることなしには、基礎を確立することはできず、変化を知らなければ新しい発展もない。真に流行を得ればおのずから不易を生じ、また真に不易に徹すればそのまま流行を生ずるものである。相反するようみえる流行と不易も根源は同じである。」

新任校長の年度に、東北地方は、大震災による未曾有の被害を受けました。ライフラインと情報が断たれ全く先の見えない中、互いに助け合い、譲り合い、感謝し合った姿。未来に希望を持ち、救助・救命・復旧・復興のために努力する姿。日本人の秩序ある行動は、世界に衝撃を与え称賛されました。日本の教育に携わる者として教育の成果であると自信を深め、この姿こそ不易であると感じました。一方、真実や価値すらも歪めてしまう国際社会、世界と渡り合うためには外国語が必要です。情報化社会では、欲しい情報を速やかに入手することが求められます。流行も必要なのです。

私達校長は、不易と流行を見極めバランス良く教育課程に位置付け、平和で民主的な社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な児童の育成に努めなければならないと思うのです。

西郷村立羽太小学校長 稲林 敬

田んぼの中を黄色いジャンパーの見守り隊に挟まれ一列になってずんずんと歩く子供たち。学校に着くとすぐに、校庭に飛び出し県庁マラソンをする子供たち、花の水やりやボランティア清掃に取り組む高学年の子供たち。そして、さわやかなあいさつ。私の好きな朝の風景です。

どの子も柔らかで生き生きした素敵な表情をしています。それは「やらされている」からではなく、「自分からしている」からだと思います。本校の校訓「自ら育て 自主・自立」の目指す姿が少し具現化され、そこに表れていると感じます。

書家相田みつを氏の言葉に「幸せはいつも自分の心が決める」とあります。自分では何もできなかったと反省ばかりですが、学校を預かる校長として、最後の年にこうした子供たちの姿を見ることができ、「幸せ」を感じます。

私には教員37年間の中で大切にしていた言葉、考え方が2つあります。

1つは大学時代、中学校の教育実習をした際、道德でソクラテスの「無知の知」を題材に授業をしました。「自分は無知である、でも、そのことを自分は知っている」だから「賢い」ではなく、逆に謙虚な人でいたいと思うようになりました。

2つめは、今から20年も前になると思いますが、たまたま古本屋で見つけた松下幸之助氏の「日本と日本人について」という本に出会いました。著書の中で松下氏は古代からの日本の歴史を通して、日本人の特質について次の3点があると述べています。それは「衆知を集める」「主座を保つ」「和を貴ぶ」です。「衆知を集める」とは、「衆知を集めてものを考え、ことを決する」、「主座を保つ」とは、「他から様々な文化や思想を取り入れても自分を失わないで、自主性、主体性を持つこと」、「和を貴ぶ」とはその言葉通りです。

私は経営の神様と言われた松下幸之助氏の考えに共感し、職場の和を大切に、先生方の考えを広く取り入れ、しかし最終的には自分らしさを失わないよう努めてきました。この2つの言葉、考えが教員としての私の37年間を支えてくれたように思います。

## 教員生活を振り返って

## つながること 連携すること 協働すること

矢吹町立三神小学校長 佐川 栄

昭和58年の4月に、2年間の民間会社勤務を終え、初めて教員としてスタートしました。振り返ると、初任校の諸先輩教師は実に堂々と毎日の教育活動をすすめて、私は「とにかくついていきたい」と気ばかり空回りする日々でした。あれから様々な出来事がありましたが、36年間何とか務められたのは、職場の先生方、保護者や地域の方々、生徒からの声、声、声、そして現校長会の校長先生方のご指導のお陰であると思ひ、感謝の気持ちでいっぱいです。

三神小学校勤務は3年目になります。水田が広がり自然は豊か、閑静な所です。本校には、毎年1月に「火災防止凧あげ大会」という伝統行事があります。火災防止というスローガンのもと、冬休み中に親子が協同して凧を作り、大空に高くまいあげます。各家庭では、この大会を心待ちにしています。意気を合わせて盛んに糸を手繰る姿には、その家族のとても強い絆が輝いて見えます。三神地区の伝統行事が小学校で脈々と続いていることに、とても熱い感動を覚えました。その地域にとって学校とはどんな存在なんだろうと時々考えてきましたが、今「学校は地域のかげがえのない文化の連結点、新しい歴史の発信点」ではないかとはっきり思えるようになりました。子ども達はとても素直、保護者そして地域の方々はとても温かい風船のような気持ちで子どもを包み、応援しています。ここに生まれてよかった、ずっとここで生きていきたいと思う児童もたくさんいることでしょう。親から子へ、子から孫へ、学校という舞台で地域の歴史的な文化が継承されていきます。その熱い思いに心温まる3年間でありました。

この36年間は、子ども達と保護者の声にどれだけ心動かされたか、また元気をいただいたか、気が付くともうこんなに月日が流れたのかという感じですが、とにかく私自身は生かされてきたのは間違いありません。退職後の具体的な生活イメージはまだ作れません。しかし、自分の故郷・郷土に何らかのお手伝いをできれば幸いかなと考えています。三神地区から教えてもらったように、郷土を愛する心を大切にして、地域の発展に少しでも役に立てればと考えています。

泉崎村立泉崎第二小学校長 鈴木 一正

各校では、来年入学する子どもたちや保護者に向けた説明会(一日入学)等が行われていることと思う。例年、この時期になると行われる取り組みであり、年度のまとめと共に新年度に向けた準備として重要である。わたしの今までの少ない経験では、説明会は学校から一方的な情報提供やお願いに終始していたように思う。

遡ること3か月前。機会あって幼稚園長先生と入学準備について話題となった。幼稚園と小学校の教育内容のつながりや環境の違いについて理解してもらおうこと。教師と保護者がしっかりと手を携えて教育を行う必要のあることをどのように伝えたらよいかである。これを受けてすぐさま小学校長同士で協議をした。その結果、幼稚園でそれぞれの小学校長が直接保護者に情報提供や思いを伝えることでまとまった。柱として幼稚園と小学校の生活、教育内容の違いの理解。大人(親・教師)として子ども達の成長への関わり方である。二つの小学校の校長が話す内容について重複の回避と重点化について協議した。後に30分程度の持ち時間で、できる限りの資料を活用して話をした。思い通りにできたかどうかは未知数であるが、概ね好評であったようだ。今年度初めての取り組みであるが、幼稚園と小学校が子どもを中心としてよりよい教育環境を醸成するための連携のあり方の一例であると思う。幼稚園1園、小学校2校、中学校1校。ありがたいことにそれぞれの長は、率直に意見を述べ合い、建設的な提案に協働して取り組む関係性があると自負している。さらに教育委員会事務局から助言と指導をいただき解決に導く環境が整っている。幼小のみならず、小中の関係も同様のことが言える。

まもなく一日入学を実施する。前回に続き今年度は、二度目のチャンスとなり、より焦点化、具体化した話ができる。真の意味で教師と保護者が同じ認識に立てることを願っている。本校のスローガン「笑顔 輝く 二小の児童」は、その指標である。笑顔の溢れる学校教育が展開できる。そこには、教育長様、教育委員会事務局、幼・小・中の園長、校長先生方、本校の職員の力があることに感謝したい。

## 行財政部調査報告書の意義と活用について

## 最適解を

東西しらかわ小学校長会行財政部長 佐藤 宏道  
(白河市立小田川小学校長)

今年度より東西しらかわ小学校長会となり、行財政部の活動も県南域内の37の小学校が情報を共有しながら同じ方向で開始しました。学校では、学習指導要領の完全実施まであと2年を切り、学校教育が大きく変化しようとしている中、校長先生方におかれましては調査研究をはじめとした行財政部の取組にご理解とご協力をいただき感謝申し上げます。

さて、5月には「教育行財政に関する調査」として、教職員の配置等に関する調査、教育施策の実施状況に関する調査、大地震・原発事故の影響に係る調査にご協力をいただきました。9月には、県全体の調査結果が集計された報告書が県小学校長会のHPに掲載されました。この報告書は、福島県の全小学校(437校)、全学級(4,538学級)について調査した結果をまとめたものです。調査項目ごとの集計結果の他に「分析・考察」が記載され、福島県の小学校教育の現状を多面的・多角的に見ることができ、自校及び支会で人的・物的な教育環境や教育課程の改善を図っていくためにとても有効な資料の一つと考えられます。また、今回の資料は、福島県議会議員様や各市町村長様、教育委員会教育長様に「義務教育の充実・振興について」の要望活動の基礎資料となっております。現在、来年度の教育課程編成に向けて各校で取り組まれているかと思いますが、是非活用していただければありがたいです。

今後の活動といたしましては、3月に平成31年度「教職員人事の反省」の取りまとめが予定されています。人事異動は、学校にとって次年度の教育活動を左右するとともに教職員の意欲を高めるととても大切なものだと思います。そのためにも、各校より具体的な改善策や提案をいただければありがたいです。

また、教育活動を推進していく中で、行財政上の観点から要望等がありましたら、担当までお知らせ下さい。支会長様にご指導をいただき、改善を図っていきたく思います。今後ともよろしく願いいたします。



東西しらかわ小学校長会特別調査部長 小野 聡  
(泉崎村立泉崎第一小学校長)

「学校移転がリードした全町避難」は、7月に実施した「復興に向けた課題及びその解決のための具体的取組構想」の視察における、当時の大熊町教育長武内敏英氏の講演のタイトルです。武内前教育長は震災直後の混乱の中にあっても、子ども達への最良の教育を保障するために冷静に現状を見極め、会津若松市での学校再開を判断、即行動に移されました。多くの町民が行動を共にし、震災直後の4月16日には再開を実現した教育への熱い思いや非常時におけるリーダーの在り方等について学ぶことができました。「学校は地域の中心となる(町民を集める)力がある」という武内氏の言葉もとても印象に残っています。

また、大野小学校加村育夫校長先生、熊町小学校阿部裕美校長先生からは、学校再開の経過や現在の学校経営の現状と課題等の説明だけでなく、校舎を案内していただき、「読書の町おおくま」、「ふるさと創造学」等の取組を垣間見ることができました。心のサポートを第一とした一人一人へ寄り添った支援、現状を踏まえた少人数教育の在り方等についても教えていただきました。

2022年にふるさと大熊町で学校が無事に再開されることをお祈りすると共に、県内の各学校の復興の状況を正確に理解するためにも、今後も視察を継続できればと考えます。

4月の研修では昨年度同様「学校経営上の諸問題」等について協議し、各校の課題に対する改善策や具体的な取組などをお聞きするだけでなく、新任の4名の校長先生方の学校経営に関する思いや考え等を拝聴することができ、意を新たにすることができました。

11月の研修会では、「プログラミング教育」について、教育センターの指導主事等による出前講義、教材会社によるプログラミング教育に関する教材の説明を受け、理解を深めるよい機会になったのではないかと思います。

今後も学習指導要領の実施に関する情報交換、教員の資質向上や働き方改革等、山積する課題に対する最適解を導き出せるような研修会を企画していきたいと思っております。